

中澤聡太郎君 渡航のご報告

12月5日、中澤聡太郎君を無事ロマリダ大学に送り届けることが出来ました。

さて、渡航直前の聡太郎君には2つ重大な問題が発生しました。

その一つは硬膜下血腫という頭の中の出血です。11月29日、私たちは聡太郎君の頭のCT検査(X線による断層撮影)を行い、この硬膜下血腫を発見しました。聡太郎君は心臓の動きが極端に低下したために、心臓の壁に付着する血液の固まり(血栓)ができました。放置すると血栓の一部がはがれ、血液の流れによって重要な頭の血管を閉塞する可能性があるため、血液を固まりづらくする治療を続けておりました。幸い心臓の中の血栓は縮小したのですが、この治療の影響で何かの拍子に頭の中に出血したと考えられます。心臓移植など心臓の手術を行う場合、心臓が動いたままでは手術を行うことは出来ません。人工心肺装置という心臓と肺の働きの代わりにする機械を装着し、心臓の動きを止める必要があります。しかし、この機械を装着している間は、お薬で血液が固まらないようにしなければ、機械の中に血栓ができ詰まってしまうために、血液を循環させることができなくなってしまいます。一方で、頭の中に出血がある状態で人工心肺装置を使うと、血液が固まらなくなる影響で大出血に進展する可能性があります。聡太郎君に何か変わった症状があったわけでは無いのですが、万一のことを考えて私たちは渡航直前にこの検査を行うことにしました。CTで見つかった聡太郎君の硬膜下血腫は心臓の手術を行う上で重大な障害になりうるものでした。

もう一つは感染症です。聡太郎君は12月1日から発熱し、血液中から菌が検出されました。重症の心不全のため、聡太郎君の体力・感染への抵抗力は極端に低下していたのです。早期発見・早期治療にも関わらず、発熱にともなって脈が速くなったり不穏状態になったりと、搬送に耐えられるかどうか自体に問題がありました。渡航前日の12月4日になっても、全身の炎症の強さを示す検査データはまだ万全といえる状態にはなっておりませんでした。

これら二つはいずれも移植の行方を左右しかねない重大な合併症であり、私たちはロマリダ大学のスタッフと直前まで渡航の可否に関して協議を重ねました。ロマリダ大学側も私たちも、この二つの問題が解決しない限り、聡太郎君が移植を受けることは困難、最悪の場合、移植を受けること自体が出来ない可能性もあるとの点で一致しておりました。一方で、この二つを治療する間にも聡太郎君の心臓は弱って行きます。治療の過程で聡太郎君の心臓が耐えられなくなった場合、国内にいる限り移植はおろか救命することすら困難な事態も十分ありえます。また治療に時間を要した場合には、仮にこの二つから回復しても、渡航できないくらいに心臓が弱ってしまう可能性もあります。私たちは、データだけではなく実際の聡太郎をロマリダ大学のスタッフに診察していただかなければ正しい治療方針は決定できないと考え、ご家族とも十分相談のうえ、万一、合併症のために移植の対象外とされることがあったとしても、可能性がある以上は聡太郎君を搬送するという

決定をしました。また、渡航の時期に関しては、12月5日の朝の検査データや聡太郎君の状態をみて最終決定することにしました。

12月5日の検査データは決して100%と言える状態ではありませんでしたが、聡太郎君の目が輝きを取り戻し始めていることから、最終的に予定通りの搬送を決定しました。12月5日午前9時のことです。幸い、搬送中は時間を経るにしたがって聡太郎君の状態は落ち着きを取り戻し、発熱は無く、血圧や血液中の酸素濃度も安定して経過しました。飛行機の中では笑顔も見られるようになり、搬送スタッフに抱っこされて眠りました。飛行機自体の遅れや多くの機器を持っての搬送であったため、ロマリング大学への到着が現地時間12月5日 金曜日の14時を過ぎてしまい、詳しい検査はこれから行われます。しかし、到着時に聡太郎君を診察したロマリング大学のスタッフからは「(私たちが送った)データから想像していたよりも、聡太郎君の状態はずっとよいので十分に可能性がある」とのコメントをいただいております。

ともあれ、現在の状態では、たとえ臓器提供者が現れてもすぐに移植を受けることは出来ません。当面(たぶん数週間)は硬膜下血腫と感染症の検査・治療を行いながら移植が出来る状態まで回復するのを待たねばなりません。

移植に向けた聡太郎君とご家族の闘いはまだようやくスタートラインに着いたというところ です。今後とも暖かく見守っていただければと存じます。

最後に、今回の搬送に際しましては全国各地の皆さまからご支援をいただくとともに、日本航空、神奈川県警・千葉県警などからも多大なご協力をいただきました。まことに有難うございました。

2008年12月8日
昭和大学横浜市北部病院
循環器センター
富田 英
同 小児科センター
曾我恭司
ほか 搬送チーム一同